箱崎 43

－箱崎遺跡第64次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書
第1128集

2011
福岡市教育委員会

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。その中でも東区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する箱崎遺跡第64次調査の発掘調査報告書は共同住宅建築に伴う調査成果についての記録です。この調査では古代末から中世にかけての集落を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2011年3月18日

福岡市教育委員会
教育長　山田裕嗣

例言

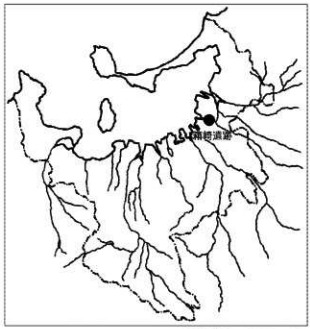
□本報告書は東区箱崎1丁目2804番2、9、10の共同住宅建設に伴って2009年8月3日から10月8日にかけて発掘調査を行った箱崎遺跡第64次調査の報告書である。
□本書に収録した発掘調査は福岡市教育委員会の屋山洋が担当した。
□遺構の実測と写真撮影は屋山が、遺物実測は濱石正子が、製図は熊谷幸重が担当した。
□本書で用いた方位は磁北である。
□調査の1面目で検出した遺構は1000番台、2面目は2000番台、3面目は3000番台の遺構番号とした。
□本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
□貿易陶磁の分類は太宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－(2000年)太宰府市教育委員会を参照した。

遺跡調査番号	0916	遺跡番号	2639	分布地図番号	箱崎　34
調査地地番	福岡市東区箱崎1丁目2804番2、9、10				
開発面積	160 ㎡	調査面積	209 ㎡	調査原因	共同住宅建設
調査期間	20090803～20101008			担当者	屋山　洋

箱崎 43

－箱崎遺跡第64次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書
第1128集



遺跡略号　HKZ－64
調査番号　0916

2011
福岡市教育委員会

本文目次

Ⅰ　はじめに …… 1
Ⅱ　調査の記録 …… 3
1　調査の概要 …… 4
2　遺構と遺物 …… 7
1）溝 …… 7
2）土坑 …… 11
3）井戸 …… 23
4）整地層 …… 30
5）その他の遺構と遺物 …… 32
4　小結 …… 35

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図（1/50,000） …… 2
第2図　調査地点位置図（1/4,000） …… 2
第3図　調査区範囲図（1/200） …… 3
第4図　調査区第1面全体図（1/80） …… 4
第5図　調査区第2面全体図（1/80） …… 5
第6図　調査区第3面全体図（1/80） …… 6
第7図　調査区壁面土層実測図（1/60） …… 7
第8図　SD1188・2135実測図（1/40・1/60） …… 8
第9図　溝出土遺物実測図1（1/4） …… 9
第10図　溝出土遺物実測図2（1/4） …… 10
第11図　SK1034・1035実測図（1/40・1/4） …… 12
第12図　SK1172・2065・2075・3018実測図（1/20・1/4） …… 14
第13図　SK3044実測図（1/20・1/4） …… 15
第14図　土坑実測図1（1/40） …… 16
第15図　土坑実測図2（1/40） …… 18
第16図　土坑実測図3（1/40） …… 19
第17図　土坑実測図4（1/40）・土坑出土遺物実測図1（1/4） …… 19
第18図　土坑出土遺物実測図2（1/4） …… 21
第19図　土坑出土遺物実測図3（1/4） …… 22
第20図　SE1047・1147実測図（1/60・1/4） …… 24
第21図　SE2001・2003実測図（1/60・1/4） …… 25
第22図　SE2005・2062実測図（1/60・1/4） …… 26
第23図　SE2076実測図（1/60・1/4） …… 27
第24図　SE2145実測図（1/60・1/4） …… 28
第25図　SE2201・3087実測図（1/60・1/4） …… 29
第26図　SX1058、1057実測図（1/30・1/60・1/4） …… 31
第27図　SX1057（1067・1068）出土遺物実測図（1/4） …… 32
第28図　SX1140出土遺物実測図（1/4） …… 33
第29図　遺構面掘り下げ時出土遺物（1/4） …… 34
第30図　石製品・石錘・土錘実測図（1/4） …… 35

表1　銅銭一覧表 …… 36

図版目次

図版1　1.Ⅰ区1面　2.Ⅰ区2面　3.Ⅰ区3面　4.Ⅱ区1面　5.Ⅱ区2面　6.Ⅱ区2面　7.Ⅱ区3面　8.SX3006
図版2　1.SE1147　2.SE2001　3.SE2006　4.SE2062　5.SE2076　6.SE2145　7.SE3054　8.SE3087
図版3　1.SK1035上層　2.SK1035下層　3.SK2075　4.SK3018　5.SK3044　6.SK1187遺物出土状況　7.SK1058　8.SK1057
図版4　1.SK1017上層　2.SK1034上層　3.SK1045礫出土状況　4.SK1112　5.SX2107検出状況　6.SD1008・SD1016　7.SD1182土層　8.調査区北東壁土層

Ⅰ．はじめに

1 調査に至る経過

平成21年（2009年）5月22日付けで、福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に福岡市東区箱崎1丁目2804番2，9，10の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書（21－2－117）が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財である箱崎遺跡群の中に位置するため、埋蔵文化財第1課では遺構の有無の確認が必要と判断し、2009年6月11日に重機による確認調査を行った。その結果、現地表面からの深さ80㎝～150㎝で古代～中世の包含層と遺構が確認された。この調査結果から、計画されている建物基礎では遺跡が破壊されるため、建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査を行い記録保存を図ることが必要であると判断して、平成21年（2009年）8月3日から10月8日の期間で発掘調査を行った。調査期間中は原因者及び関係者各位の多大な御協力を得た。記して感謝したい。

2 調査の組織

調査主体　教育委員会文化財部埋蔵文化財第２課

埋蔵文化財第２課課長　(前)山口譲治　(現)田中壽夫
調査第１係長　米倉秀紀
調査庶務　古賀とも子
調査担当　屋山　洋

作業員　石田和子　岡部安正　荻野須美子　片岡武俊　河原明子　桑原美津子　鈴木誠　遠山勲
中村健三　夏秋弘子　吹春憲治　御手洗史子　吉田哲夫
整理作業　大石加代子　熊谷幸重　藤野洋子

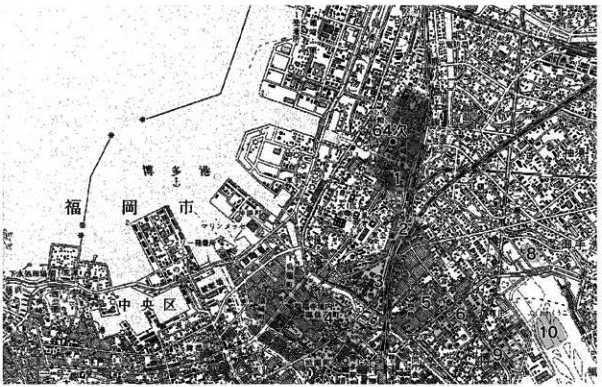
3 調査の経過

申請地の敷地面積は397㎡で、今回は建物建設部分の160㎡とその周囲1mを調査対象とする。現地表面から砂丘面までの深さが150㎝と深く、廃土置場が足りないため、調査区を東西に分けた。

7月28日と29日に表土剥ぎを行い、8月３日に調査を開始した。調査は対象地の西側2/3をⅠ区とし、1面の調査を8月3日から8月13日まで、2面の調査を8月14日から9月4日まで、3面の調査を9月8日までの行程で行った。各調査面間の掘り下げは手掘りで行い、掘り下げ中に出土した根石などは実測してから取り外した。９月９日に打って返しを行い、翌9月10日にベルトコンベアの設置などを行ってからⅡ区の発掘調査を開始した。1面を9月18日まで、2面目を10月１日まで行い、3面目が終了したのが10月7日である。翌10月8日に機材と遺物の撤去を行い、調査を終了した。

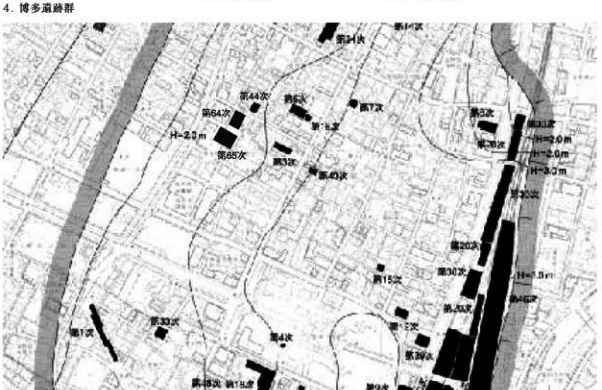
4 立地と環境

箱崎遺跡群は博多湾に面し、多々良川河口に形成された南北方向の砂丘上に位置する。この古砂丘は「箱崎砂層」と呼ばれ、縄文時代後晩期に形成されたと考えられているが、博多湾内では箱崎から堅粕、吉塚、博多、天神、唐人町、西新、藤崎と河川に切られながらも断続的に連なる。箱崎遺跡では弥生時代後半からの遺構が確認されており、古墳時代、古代、中世、近世と連綿と集落が続くが、特記すべきは10世紀前半に建立された箱崎宮で、それ以降は箱崎宮を中心として集落が形成される。箱崎遺跡の東側を流れる宇美川の河口は、中世まで入り江が入り込んでおり大宰府の港の一つである「箱崎津」が存在したが、箱崎宮が建立されて以降は「博多津」と並んで中国や朝鮮などとの交易の拠点の一つとして繁栄した。

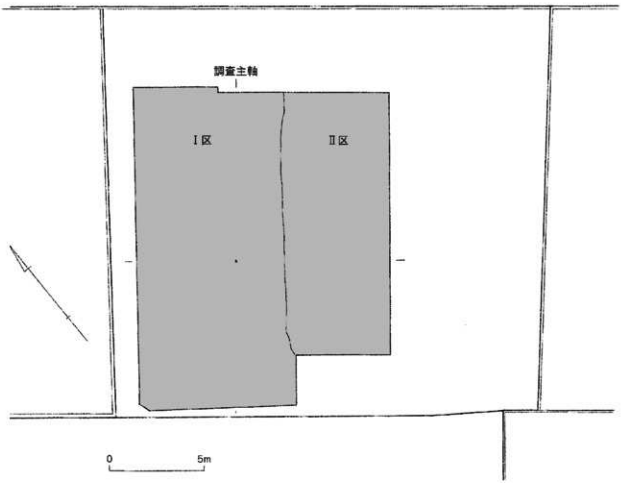


第1図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

1. 箱崎遺跡
2. 古塚本町遺跡
3. 堅粕遺跡
4. 博多遺跡群
5. 吉塚遺跡
6. 豊遺跡
7. 多々良遺跡
8. 大井遺跡
9. 榎田遺跡
10. 上牟田遺跡



第2図　調査地点位置図（1/4,000）



第3図　調査区範囲図（1/200）

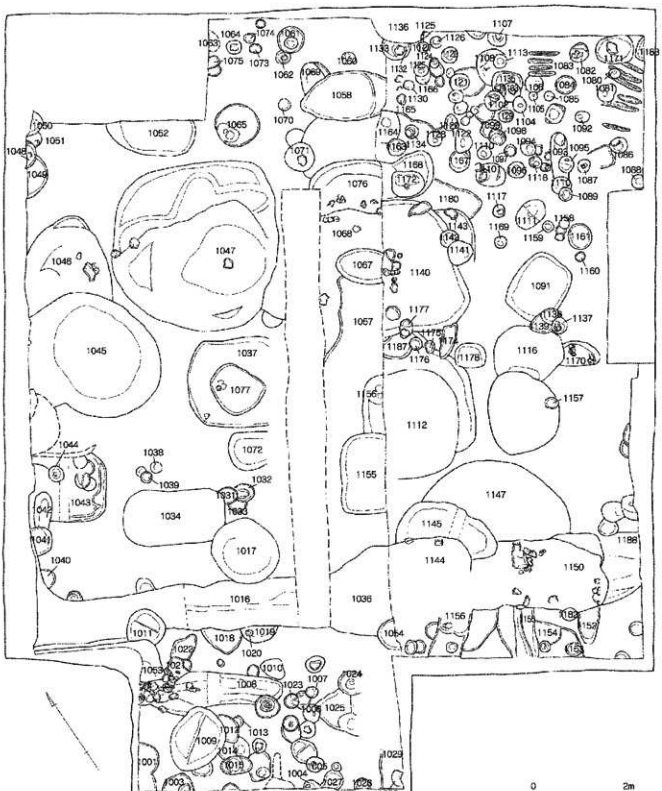
Ⅱ．調査の記録

1 調査の概要

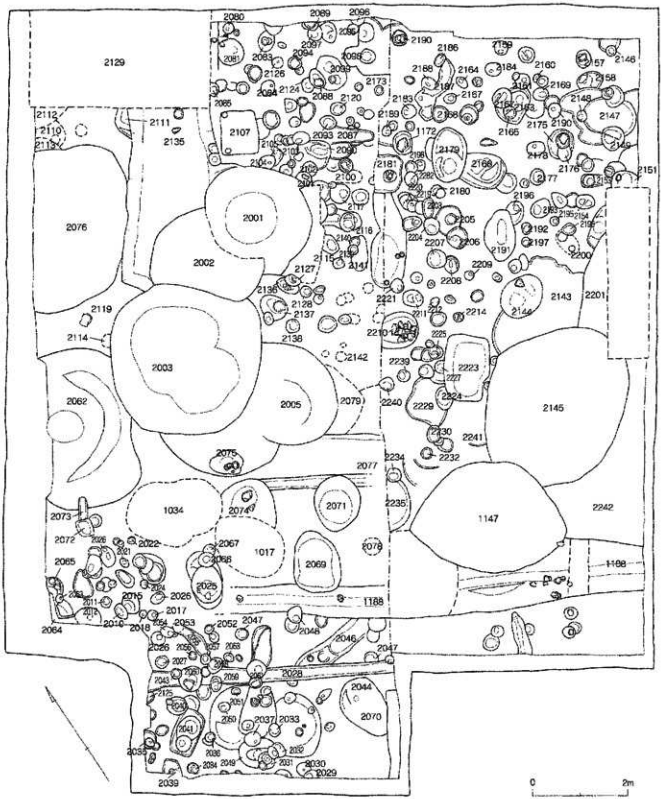
現地表面からの深さが80cmから150cmの間に、調査面を3面設定して調査を行った。1面は現地表から60～80cmほど掘り下げた標高2.7mに設定した。1面の上に堆積した厚さ40～60cmの暗茶褐色土はほとんど遺物を含まず、暗茶褐色から1面に掘り込んだ遺構は確認できない。1面の直下に整地層があり、そこから13世紀後半～14世紀初頭の貿易陶磁が多く出土した。1面の遺構は整地層上からの掘り込みであり、遺構の多くは13世紀末～14世紀中頃に掘られたものである。その後の14世紀後半以降の遺物はほとんど出土しない。暗茶褐色土が堆積した時期は1面の遺構が廃絶した14世紀後半以降と思われるが、それから近代までの長期間に柱穴や土坑が掘り込まれた痕跡がないため、掘り込みに対し強い規制がかかる特殊な場所であったと考えられる。

2面は第1面から40cm掘り下げた標高2.3mに設定した。井戸の多くは第2面で検出したが、掘方の輪郭は1面で見えていた井戸もあり、1面から掘り込まれた井戸が多いと思われる。また2面で検出した遺構は、1面のような大形の土坑は減り、ほとんどは径が20～40cm前後の柱穴となる。

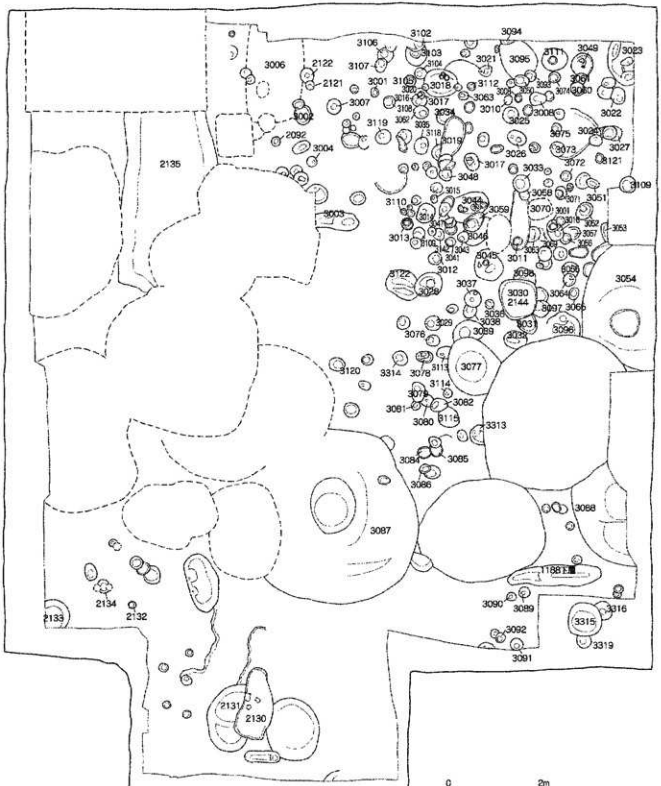
最下層の3面は砂丘上面に設定し、標高2.0mを測る。3面で出土した遺構の多くが柱穴状遺構で、掘方径は20～30cmと小形である。時期は11世紀後半～12世紀頃と考えられ、砂丘の発達により集落が海側に拡張したが、最初は掘立小屋などの小型の建物が建てられたのであろう。3面の砂丘直上には炭化物や焼土ブロックを多く含む層がみられ（第7図・図版4－8）、集落が営まれ始めた当初に複数回の火災に見舞われた可能性がある。



第4図　調査区第1面全体図（1/80）



第5図　調査区第2面全体図（1/80）



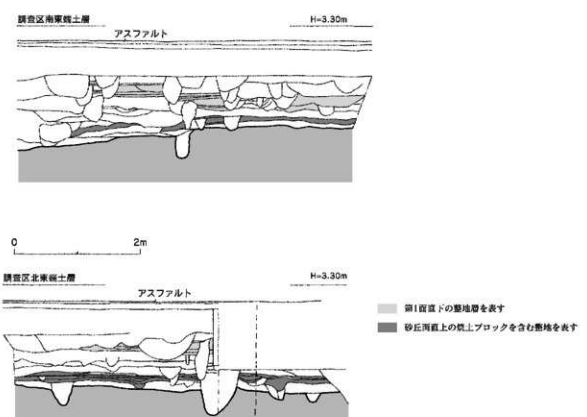
第6図　調査区第3面全体図（1/80）

2 遺構と遺物

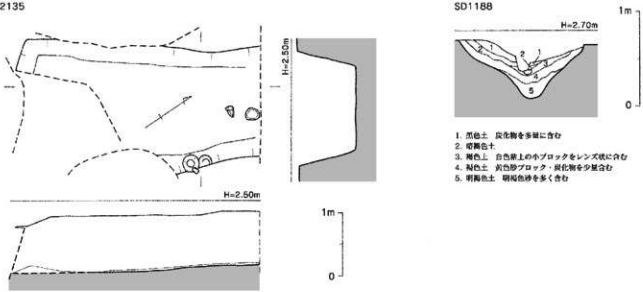
1)溝　1面と2面で検出した10本を報告したが、SD1016・1036・1150・1151・1188の5本は同一の溝かその掘り返し、1008と2028も同様に掘り返しと思われるので実際は5本である。5本の溝のうち第1面で2本、第2面で3本検出したが、SD2046を除くと、他の溝の方位は現在の地割りに沿う。SD2046はほぼ東西方向を向いており、当初は東西南北を意識した区画で、その後に砂丘の等高線に沿った現在の地割りへ変化したと考えられる。地割りが変化した時期はSD2046がSD1016と2028に切られることから、SD1016や2028が掘られた13世紀後半頃と考えられる。SD1016は調査区南端側に位置しており、この溝の北側に井戸が集中する。溝の南側には井戸がないことから、敷地内を区画する溝で、庭の隅に井戸が集中するのではと考えた。ただ、2010年に調査した南側隣接地の第65次調査では同時期の井戸が検出されており、SD1016が井戸がある空間とその他を分ける区画溝とは単純には言い難い。これらの溝が敷地境界近くにあることを考えると、65次調査区との間に道路があり、SD1016が北側側溝である可能性を考えたい。そう考えると1面でSD1016から南側に井戸や大型の土坑がないのは道路だからであり、南側の65次調査地点は道路を挟んだ別の屋敷地と考えられる。

SD1008(第4図)　調査区の南端で検出した東西方向の溝で、東端は調査区内で立ち上がる。主軸は北から60°ほど西を向き、現地割りに沿う。幅は45～90㎝、検出面からの深さは18㎝を測る。底面の標高は東端で2.6m、西端で2.5mを測る。調査区西端で径15～20㎝の礫が多数出土した。埋土は黄褐色粘質土で、青磁片、白磁皿Ⅸ類、須恵質鉢、土師坏・皿が出土した。13世紀後半以降である。

SD1016(第4図)　調査区の南端近くで検出した東西方向の溝で主軸をN-62°-Eにとる。幅はⅡ区で1.1～1.3mを測るが、Ⅰ・Ⅱ区の境界部分で急に狭くなり、1m前後になる。検出面からの深さは60



第7図　調査区壁面土層実測図（1/60）



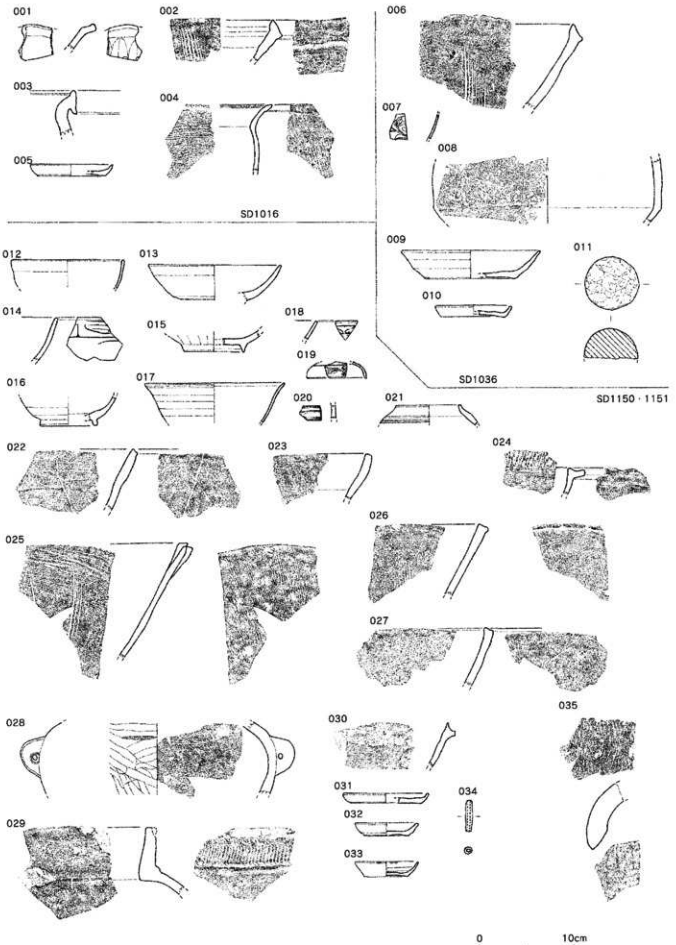
第8図　SD1188・2135実測図（1/40・1/60）

cmを測る。底面の標高は東端で2.4m、中央で2.1m、西端で2.3mを測る。Ⅰ区では試掘トレンチの東で幅が変化するため、別遺構と切り合っている可能性を考えて試掘トレンチから東を1036、西を1016とし、Ⅱ区では当初、平行する2本の溝に見えたことからSD1150と1151とした。埋土は西側の1016が暗灰色を呈し、東側の1150・1151は灰褐色で黄褐色粘質土ブロック（径2～3cm）を全体的に多く含む。出土遺物（第9図001～011）。001は龍泉窯系青磁坏Ⅲ類である。002は備前擂鉢で灰赤褐色を呈す。胎土は暗灰色である。003は常滑甕の口縁である。色調は灰赤褐色～黒色を呈し、全体に横ナデを施す。004は土師器甕である。色調は暗黄褐色を呈し、器壁は4mmと薄い。外面に煤の痕跡が残る。005は土師皿で復元口径8.7cm、器高1.25cmを測る。色調は淡褐色を呈す。006～011は1036とした場所から出土した。006は備前擂鉢である。007は白磁碗、008は土師質で茶釜か。009は土師坏で復元口径14.8cmを測る。被熱のため赤変し、内外面全体に煤が付着する。010は土師皿である。復元口径98cmを測り、淡褐色を呈す、内外面に煤が付着する。011は石玉である。13世紀後半か。

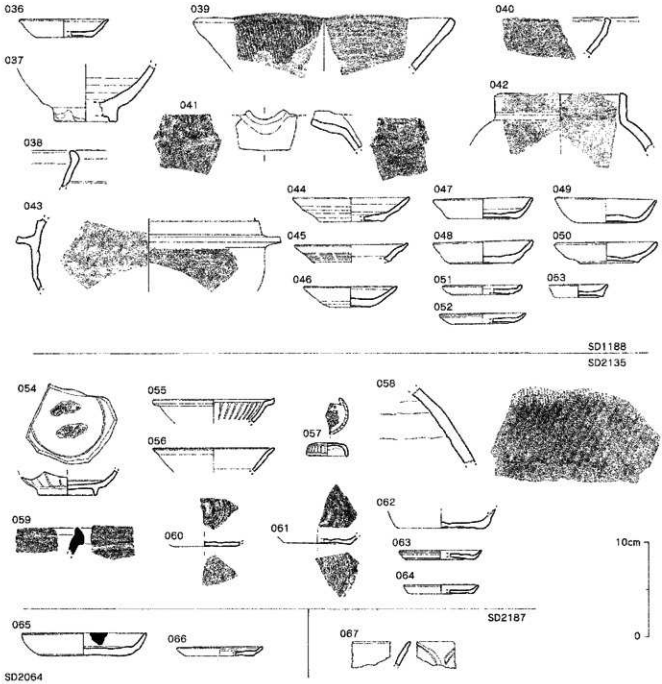
SD1150・1151・1188　SD1016関連のうちⅡ区で検出した部分である。1188は2面で検出したが、1面の1150との関連を考えて遺構番号は1000番台とした。幅は96～184cm、検出面からの深さは60cmを測る。底面は幅20～30cmで、底面の標高はⅡ区の東西両端が2.13mなのに対し、Ⅱ区中央が1.98mと最も低い。埋土は灰褐色を呈す。出土遺物（第9・10図012～053）。012～035はSD1150・1151出土分で、012～016は龍泉窯系青磁碗、017は白磁碗Ⅸ類、018は染付、019は白磁合子蓋である。020は陶器片、021は陶器壺、022～024は土鍋、025～027は土師質鉢、028～030は瓦質で、028・029は茶釜、030は羽釜か。031～033は土師皿で、033は灯明皿として使用している。034は土錘、035は土師質の丸瓦である。036～053は1188出土分で036は白磁皿Ⅸ類である。037は陶器壺の底部で、釉は黒色に灰黄色が混じる。038は陶器鉢で赤褐色を呈す。039～041は土師質鉢で、041は注口がつく。042は土師質茶釜、043は土師質羽釜、044～050は土師坏で、044～046は口縁が「ハ」の字形に開く。051～053は土師皿である。これらから1150・1151・1188が埋没した時期は14世紀と考えられる。

SD2028（第5図）　調査区南端部に位置する。1面のSD1008とほぼ重なる。幅は27～33cm、検出面からの深さは28cmを測る。底面の標高は東端が2.16m、西端が2.10mで西側が低く、中央部は凹凸が多い。埋土は暗褐色砂質土で、灰褐色土のブロックをレンズ状に含む。埋土中から白磁碗V-4類、白磁皿、土師坏・皿の小片が出土した。遺物の時期は12世紀後半頃を主としている。

SD2046（第5図）　調査区南端部のSD1188と2028間で検出した東西方向の溝で、1188と2028の両方に



第9図　溝出土遺物実測図1（1/4）



第10図　溝出土遺物実測図2（1/4）

切られる。主軸はN-84°-Eである。幅は45cm前後で、検出面からの深さは24cmを測る。底面の標高は東端が2.12m、西端が2.19mを測る。遺物は土器片が2点出土したのみで、時期は不明である。

SD2077（第5図）　調査区中央南寄りに位置する。Ⅱ区で検出できず、Ⅰ区で溝の北縁だけ検出した。南縁は確認できていない。検出面からの深さは80cmを測る。Ⅰ区ではSD1188の北縁が検出できておらず、この2条が同一の溝であれば幅が4m前後となる。遺物は多く、龍泉窯系青磁碗の他に常滑壺や陶器壺Ⅳ-1b、瓦器椀、土師坏、須恵質平瓦（斜格子）、羽口が出土し、13世紀前半頃と考えられる。

SD2135（第8図）　調査区の北端に位置する南北方向の溝で、主軸はN-34°-Eを測る。現状で南北長約4m、幅は170～200cmで、検出面からの深さは約1mを測る。底面の標高は北側が1.50m、南側が1.48mとほぼ水平である。南端をSE2003に切られる。SE2003直前で底面が立ち上り、元々南側へは延びていなかった。出土遺物（第10図054～064）。054・055は龍泉窯系青磁坏である。056は白磁

碗、057は白磁合子蓋である。058は渥美焼の壺で色調は灰褐色を呈す。059は須恵質鉢、060～064は土師坏・皿で、060･061は内底部に強い回転ナデの痕跡がつく。13世紀後半である。

2)土坑　調査区内で多くの土坑が出土した。その多くは区画溝の可能性があるSD1016の北側に位置している。主軸はSD1016と同じく現在の地割りに沿ったものや、東西方向を意識したものもある。今後、周囲の調査を含め詳細に時期区分することで、区画の変遷の解明が必要である。

SK1034(第11図)　調査区の南西側に位置する。平面は隅丸長方形で、主軸をN-90°-Wにとる。長軸217cm、幅129cm、検出面からの深さ114cmを測る。埋土は厚さ5cm程の暗褐色土層や暗灰褐色土層が水平堆積し、その間に薄い炭化物層を挟む。層の上半から土師坏や陶器甕が、底面直上から青磁や白磁、土師皿と共にウマの肩胛骨が出土した。出土遺物(第11図068～100)。068は龍泉窯系青磁坏Ⅲ類である。069・070は白磁碗、071～073は白磁皿で、071はⅨ類、072と073はⅧ類である。074は須恵器甕の胴部、075は須恵器鉢、76～085は土師坏で、086～095は土師皿、096は瓦器椀、097は瓦質の小壺、098は瓦質鉢、099は土師質の移動式竈、100は鉄製の糸切り鋏である。13世紀後半である。

SK1035(第11図)　調査区中央西寄りに位置し、SK1034に切られる。一回り大きな円形の土坑と一緒に掘り下げてしまい、当初平面形は不明であったが、土層観察用のベルトから平面形等を復元した。平面形は楕円形で、長径43cm、検出面からの深さ23cmを測る。埋土は暗褐色を呈す。底面直上から土師坏3枚と土師皿多数が出土した。出土遺物(第11図101～121)。101･102は陶器壺、103は土鍋である。104～106は土師坏、107～121は土師皿である。底部切り離しは糸切りである。祭祀土坑か。13世紀後半から14世紀前半頃と思われる。

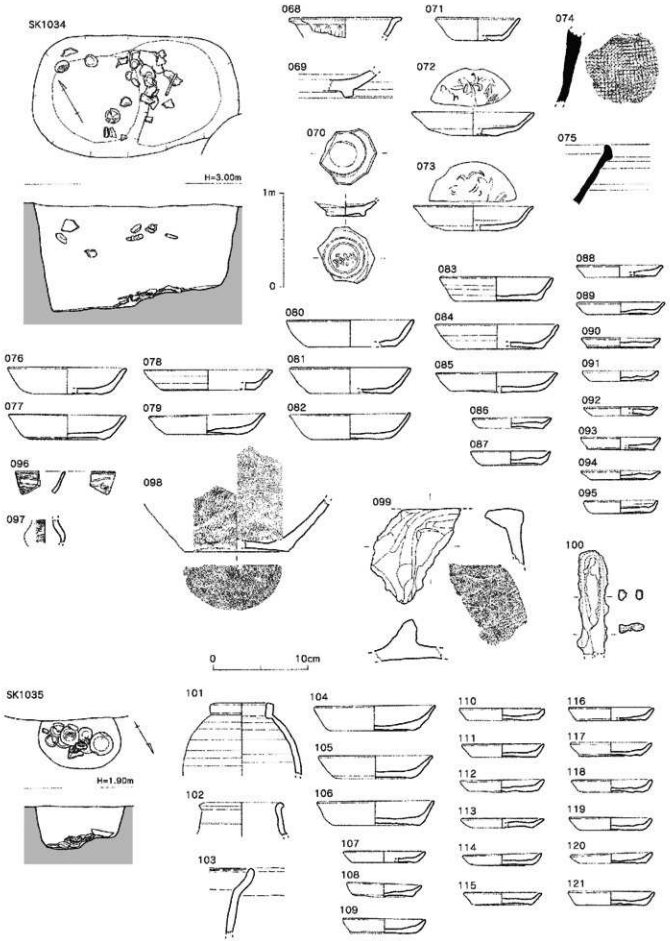
SK1172(第12図)　調査区中央北寄りに位置し、主軸をN-58°-Wにとる。東西に長い不正楕円形で長径68cm、短径53cm、検出面からの深さは26cmを測る。龍泉窯系青磁坏(第12図122)が出土した。口径は12.2cm、器高4.1cmを測る。淡灰緑色を呈し、胎土は灰白色である。13世紀中頃か。

SK2065(第12図)　調査区の南西端に位置し、掘方の約半分が調査区外に延びる。現状で南北長60cmを測る。中央を後世の柱穴状遺構に切られる。出土遺物(第12図134)。134は青磁皿である。完形で垂直に立てた状態で出土した。その他に土師坏片(糸切り)が出土した。12世紀中頃～後半か。

SK2075(第12図)　調査区中央に位置し、SE2005を切る。平面は東西方向に長い楕円形で主軸をN-57°-Eにとる。長径71cm、短径47cm、検出面からの深さは27cmを測る。出土遺物(第12図123～133)。123は同安窯系青磁碗である。124は渥美焼の大甕片で、軸は灰黒色を呈す。125は須恵質鉢、126～130は土師皿、131～133は土師坏である。12世紀後半と考えられる。

SK3018(第12図)　調査区北端部に位置し、主軸をN-58°-Wにとる。平面形は隅丸長方形で、長径70cm、短径58cm、検出面からの深さは30cmを測る。埋土の上層から中層で白磁碗や土師坏などが出土した。(第12図135～143)。135は白磁碗Ⅳ類、136は同安窯系青磁皿である。137～139は土師坏、140・141は土師皿である。142は土製品で外面がハケ、内面はナデを施す。色調は黄～赤褐色であるが、内面の一部は被熱のためか、黒色を呈す。胎土中に砂粒を多量に含む。移動式竈の破片と思われる。143は須恵質大甕の破片である。外面には隙間無く平行タタキを施す。内面は横方向にナデを施す。色調は暗灰色を呈し、胎土中に砂粒を多く含む。12世紀後半頃である。

SK3044(第13図)　調査区北側に位置し、SP3059やSP3047に切られる。東西に長い楕円形を呈し、主軸をN-33°-Eにとる。長径91cm、短径50～60cm、検出面からの深さ26cmを測る。出土遺物(第13図144～147、第19図242～250)。144は白磁碗Ⅴ類である。145は土師碗で口径17cm、器高5.9cmを測る。口縁下に補修用の孔があく。内面全体にミガキを施す。外面は下半が横方向のミガキで、上半はナデである。146･147は土師坏で、底部切り離しはヘラ切りで板状圧痕が残る。調整は146が回



第11図　SK1034・1035実測図（1/40・1/4）

転ナデで、内底部は静止ナデ、147は内面がミガキ、外面は回転ナデを施す。外面全体に煤が付着する。12世紀前半か。

SK1009(第14図)　調査区の南端に位置する。平面形は楕円形で主軸をN-46°-Eにとる。長径140cm、短径112cm、検出面からの深さ32cmを測る。埋土は灰褐色土で黄褐色土ブロックを多量にまんべんなく含む。出土遺物（17図148～150)。148は陶器の蓋か。褐釉で外面に草花文を施す。149は須恵器鉢で外面口縁端は灰黒色で、他は灰色である。胎土中に細砂を含む。150は土師皿で復元口径9.2cm、器高1.3cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕がみられる。13世紀中頃～後半か。

SK1017(第14図)　調査区中央からやや南西寄りに位置する。平面形は南北に長い楕円形で主軸をN-14°-Wにとる。長径146cm、短径126cm、検出面からの深さは100cmを測る。埋土は暗灰褐色土で黄褐色シルトブロックと炭化物小片を含む。土層断面をみると壁面から15～20cmほど内側に垂直な立ち上がりがみえ、井筒状を呈すが、底面の標高が湧水点から1m以上高く、井戸とは言い難い。遺構の用途は不明である。埋土は掘方が茶褐色砂質土、中央部は褐色砂で暗褐色の水平な薄い層が何枚もはいる。(図版4－1)。出土遺物(第17図151～157)。151は龍泉窯系青磁碗で細形蓮弁がつく。152は須恵質鉢、153は陶器瓶の底部、154は土師坏、155～157は土師皿である。14世紀前半である。

SK1037 (第14図)　調査区中央のやや西寄りに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、主軸はN-57°-Wで現地割りに沿う。一辺の長さは約2mで、検出面からの深さ19cmを測る。底面中央に長径110cm、短径95cm、深さ6cmの掘り込みがあるが、主軸がN-74°-Eと外側と異なり別遺構の可能性があるため1077とした。1037から龍泉窯系青磁小碗Ⅲ類、陶器鉢Ⅱ類･Ⅳ類が出土した。14世紀前半と思われる。

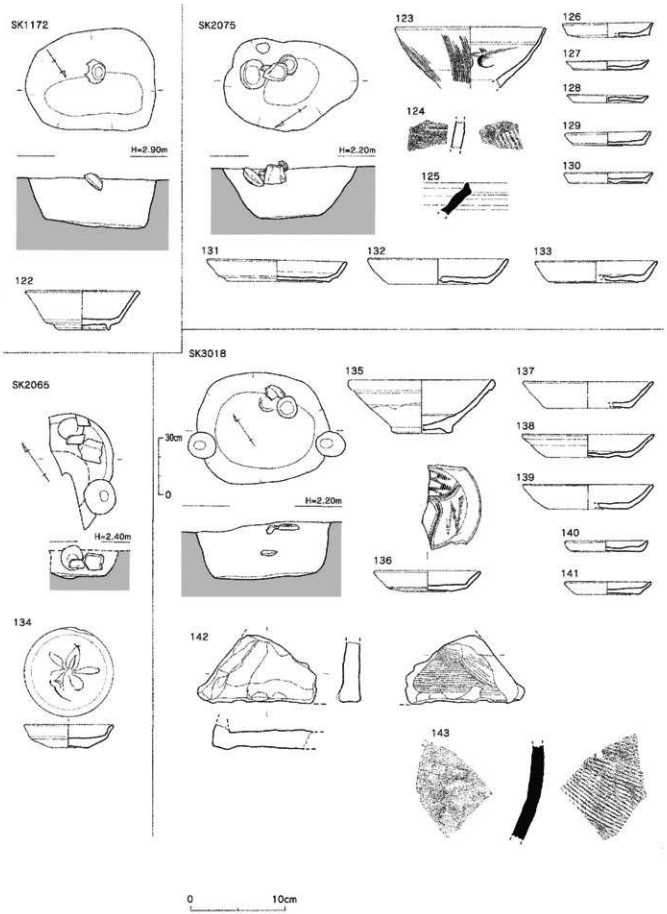
SK1045(第14図)　調査区西側に位置する。南北に長い楕円形で、主軸はN-5°-Wを測る。埋土は炭化物小片を含む暗灰色土で、長径260cm、短径230cm、検出面からの深さ52cmを測る。掘方上層で礫が多量に出土した。礫は平らで径は20cm前後と40cm前後に別れる。調査区内の柱穴から出土した根石と類似するため、建物の解体時に出てきた根石か、もしくは建設時の余剰分を廃棄した可能性がある。出土遺物（第17図158)。158は青磁の合子である。復元口径5.5cm、器高1.8cmを測る。灰緑色を呈し、外面下半には型押しの唐草文を施す。その他に青磁八角皿、同安青磁皿、白磁皿Ⅸ類、陶器盤Ⅱ類、須恵質甕、須恵質鉢、土鍋が出土した。遺構の時期は14世紀頃と考えられる。

SK1046(第14図)　調査区西端に位置し、遺構の南端をSK1045に切られる。平面形は南北に長い楕円形を呈し、主軸はN-34°-Eを測る。短径190cm、検出面からの深さは82cmを測る。底面の南西隅に径70～90cm程、底面からの深さ15cmの掘り込みがある。埋土は灰褐色土で黄褐色砂の薄い水平な層を何層も含む。出土遺物(第17図159～163)。159は瓦質の火鉢で外面にスタンプによる文様がつく。160･161は土師坏、162･163は土師皿である。14世紀前半頃と思われる。

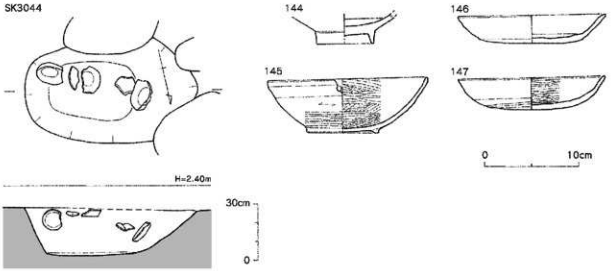
SK1052(第14図)　調査区の北西端に位置する。平面形は東西に長い楕円形で、主軸はN-56°-Wで現地割り沿う。長径190cm、検出面からの深さ31cmを測る。埋土は暗褐色で、黄褐色土ブロック（径1～3cm）と白色砂（径2～3mm）を多量に含み、炭化物小片を少量含む。青磁碗Ⅲ類、白磁皿Ⅸ類、高麗象嵌青磁、陶器壺、土鍋、土師坏・皿、土師質平瓦などが出土した。14～15世紀頃と思われる。

SK1055(第15図)　調査区中央に位置し、SK1112を切る。平面形は長方形で、主軸はN-34°-Eを測り現地割りに沿う。長径170cm、短径114cm、検出面からの深さ22cmを測る。埋土中から白磁皿Ⅸ類、陶器甕、龍泉窯系青磁碗Ⅱ類などが出土した。13世紀後半と思われる。

SK1072(第14図)　調査区中央に位置する。平面形は不整楕円形で、主軸はN-56°-Wを測る。現地割りに沿う。長径106cm、短径81cm、検出面からの深さ24cmを測る。完形の土師坏1点、土師鉢、瓦質鉢、瓦質椀、土師坏･皿が出土した。13世紀中～後半頃と思われる。



第12図　SK1172・2065・2075・3018実測図（1/20・1/4）



第13図　SK3044実測図（1/20・1/4）

SK1091(第14図)　調査区の東側に位置する。平面形は東西に長い長方形を呈し、主軸はN-68°-Eを測る。長径140cm、短径116cm、検出面からの深さ16cmを測る。土師坏・皿が大量に出土した。他に瓦器椀、陶器甕、白磁合子などが出土した。出土遺物から13世紀後半と考えられる。

SK1112(第15図)　調査区中央に位置し、SK1055に切られる。Ⅰ・Ⅱ区両方に跨り、Ⅰ区では1056としたが、まとめて1112とする。平面形は隅丸長方形で、主軸はN-34°-Eで現地割りに沿う。長径229cm、短径201cm、検出面からの深さ39cmを測る。埋土は茶褐色を呈し、ブロック状の白色砂を水平な層理状に含む。掘方直上全体に黄褐色粘土を2～8cmの厚さに貼る。出土遺物（第17図164～166）。164は瓦質の茶釜である。165は土鍋、166は常滑の甕である。14世紀後半～15世紀である。

SK1115(第14図)　調査区中央の東側に位置する。遺構の南端をSP1098に切られる。平面形は東西に長い楕円形で、主軸はN-79°-Wを測る。長径121cm、短径約110cm、検出面からの深さ89cmを測る。遺物量は多く、陶器壺、須恵器鉢(13世紀中頃)、龍泉窯系青磁坏Ⅲ類、白磁皿Ⅸ類などが出土した。13世紀後半から14世紀初頭と思われる。

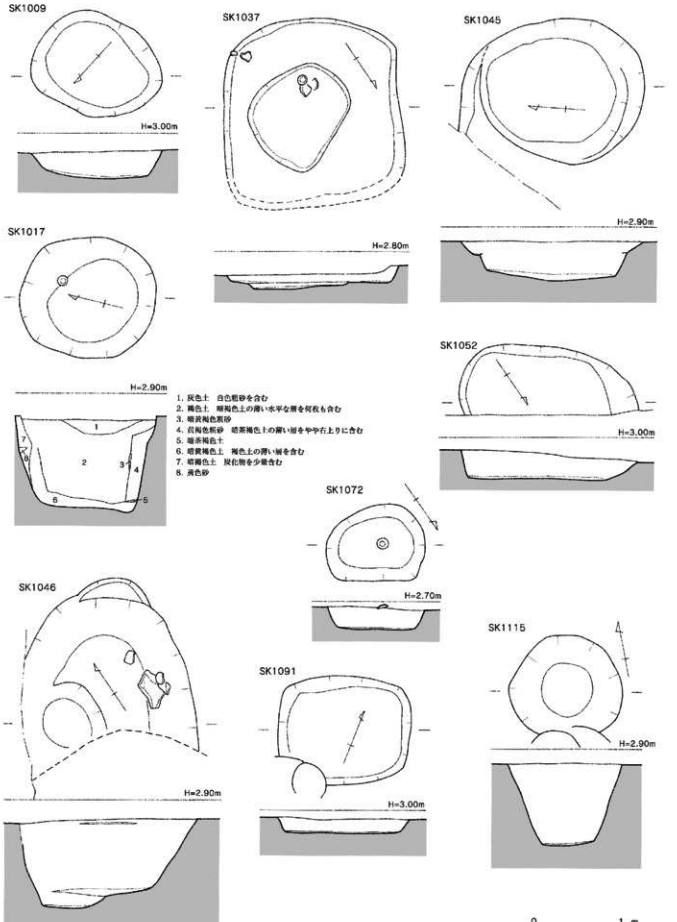
SK1116(第15図)　調査区の東端に位置し、遺構の西端をSK1115に切られる。平面形は楕円形を呈し、長径149cm、短径約120cm、検出面からの深さ70cmを測る。掘方断面は逆三角形を呈す。埋土中から青磁小碗Ⅲ類や土鍋、土師坏・皿などが出土した。13世紀中頃から14世紀初頭と思われる。

SK1136(第15図)　調査区北端に位置し、遺構の北半分が調査区外に延びる。現状で径126cm、検出面からの深さ49cmを測る。埋土中から土鍋や土師坏・皿、白磁片が出土した。13世紀末と思われる。

SK1144(第15図)　調査区の南側に位置しSD1151(1188)を切る。平面形は東西に長い長方形で、主軸をN-56°-Wにとり、現地割りに沿う。長径226cm、短径175cm、検出面からの深さ50cmを測る。出土遺物（第17図167～173)。167は龍泉窯系青磁坏、168は陶器壺の肩部、169は陶器小盤Ⅰ類である。170・171は土師質の鉢、172・173は滑石製である。漁錘か。13世紀後半と思われる。

SK1145(第15図)　調査区の南寄りに位置し、SK1144に切られる。平面形は不整な楕円形を呈し、主軸はN-49°-Eを測る。長径214cm、検出面からの深さ49cmを測る。埋土中から青磁碗Ⅰ類、陶器（盤、大甕、壺）や土鍋、土師甕、土師坏・皿、土師質瓦が出土した。いずれも小片である。14世紀頃か。

SK1173(第15図)　調査区中央の東寄りに位置する。1187と同一遺構である。遺構の大半をSK1112に切られ、残存状態は悪い。平面形は隅丸方形で、径は2.5m前後である。主軸はSK1112等と同様に現地割りに沿う。出土遺物(第17図174～188)。174は白磁皿Ⅸ類、175は細型連弁の青磁碗、176は陶



第14図　土坑実測図1（1/40）

器壺である。177～180は土師坏、181～186は土師皿で186は高台が付く。187は土製の仏像、188は石玉である。13世紀後半である。

SK2069(第16図)　調査区の南寄りに位置する。平面形はやや歪な楕円形で、主軸をN-34°-Eにとる。現地割りに平行する。長径131cm、短径97cm、検出面からの深さ78cmを測る。出土遺物(第18図189・190)。189は土師坏、190は滑石製容器である。その他にいずれも小片であるが白磁、陶器甕、瓦質坏、土師坏・皿、土師椀、土鍋、移動式竈、砥石などが出土した。13世紀後半か。

SK2074(第16図)　調査区中央の南西寄りに位置する。掘方の南側をSK1017とSK1034に切られ、主軸は不明である。現状で東西径134cm、検出面からの深さ45cmを測る。青磁碗、白磁碗Ⅳ類、須恵質鉢、瓦質椀、土師坏・皿などが出土した。13世紀中頃と思われる。

SK2079(第16図)　調査区中央に位置する。SE2005の一部である可能性もある。掘方の大半を削られ、平面形や主軸は不明である。出土遺物(第18図191～220)。191は白磁水柱の口縁から頸部である。192は白磁皿Ⅸ類、193～195は須恵質で、193は壺、194は鉢、195は甕の口縁で端部を欠損する。196・197は瓦質の鉢もしくは甕、198は瓦質の平玉である。199は瓦質の椀で、外面は研磨ののちヘラで蓮弁文を施す。200は瓦質鉢、201～206は土師坏、207～218は土師皿である。219・220は須恵質の平瓦である。13世紀後半～14世紀前半頃と思われる。

SK2110(第16図)　調査区の北西端に位置し、遺構の北側は2112に、南側は2113に切られる。平面形や主軸は不明である。出土遺物(第19図221)。221は白磁皿Ⅸ類である。復元口径10.6cm、器高2.6cmを測る。13世紀後半か。

SK2130(第16図)　調査区の南端に位置し、SK2131を切る。平面形はいびつな長方形で、主軸はN-43°-Eを測る。現地割りから約10°東にふれる。長径153cm、短径67cm、検出面からの深さ8cmを測る。遺構面の2～3面掘り下げ時に出土した。全体図では3面目に記載しているが、検出面は2面である。底部切り離しがヘラ切りの土師坏などが出土した。11～12世紀前半と思われる。

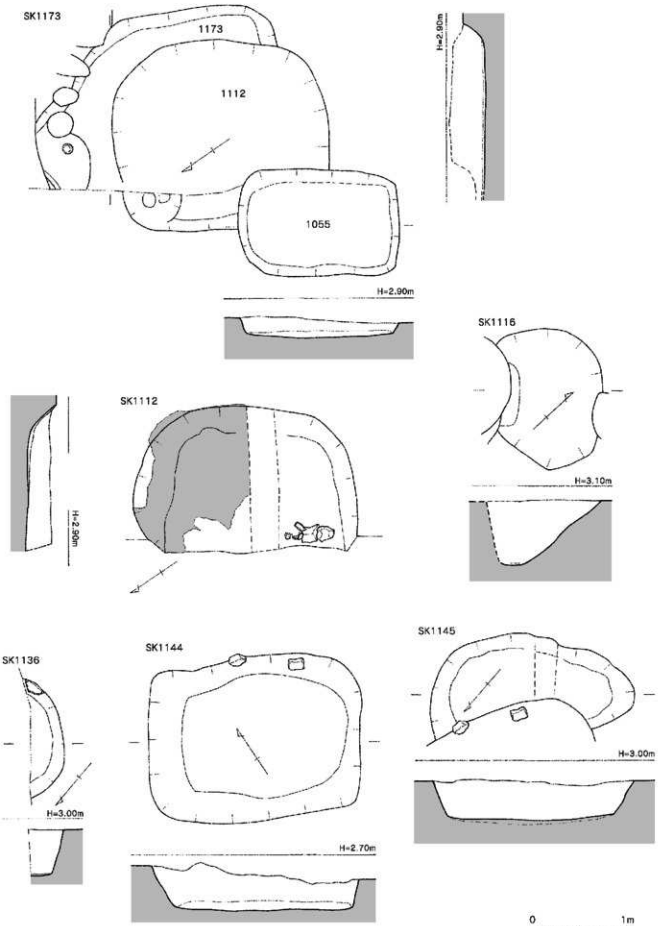
SK2131(第16図)　調査区南端に位置し、SE2139に切られる。平面形は南北に長い楕円形を呈し、主軸はN-48°-Eと現地割りとは若干方位が異なる。長径144cm、短径は約1m、検出面からの深さ23cmを測る。埋土は上層が白色細砂、下層が黄褐色砂である。白磁碗Ⅳ類、須恵器鉢、土師坏・皿(底部ヘラ切り)、瓦器椀が出土した。12世紀前半か。

SK2144(第16図)　調査区の東側に位置する。平面形は東西に長い楕円形で、主軸はN-76°-Eを測る。現地割りから40°ほど東にふれる。長径98cm、短径81cm、検出面からの深さ62cmを測る。出土遺物(第19図222～225)。222は陶器瓶、223は陶器鉢Ⅱ類、224・225は土師皿である。14世紀前半頃か。

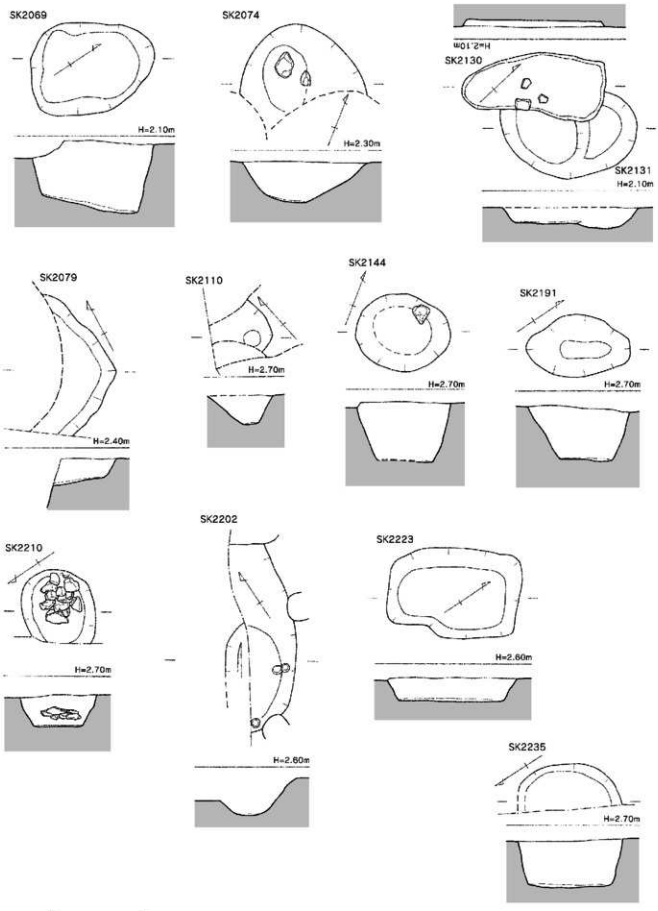
SK2191(第16図)　調査区東側に位置する。平面形はいびつな楕円形で、主軸はN-34°-Eを測る。現地割りに沿う。出土遺物(第19図226・227)。226は脚付の土鍋である。復元口径17cmを測る。口縁断面は三角形を呈し、外面は煤が付着する。227は陶器鉢か。この他に陶器(耳壺、小鉢Ⅳ-1)、青磁片、羽釜、土師坏、瓦器椀、移動式竈などが出土した。12世紀中頃～後半と思われる。

SK2202(第16図)　調査区中央の北側に位置し、主軸がN-34°-Eの現地割りに沿った楕円形の土坑である。Ⅰ区での検出時に溝の底面近くまで掘り下げたため、Ⅰ区とⅡ区で図面の掘方が合わない。遺構の北側を土坑に切られ、現状で長径2m、検出面からの深さ39cmを測る。出土遺物(第19図228～231)。228は土鍋口縁、229は土師坏、230・231は土師皿である。12世紀末～13世紀初頃である。

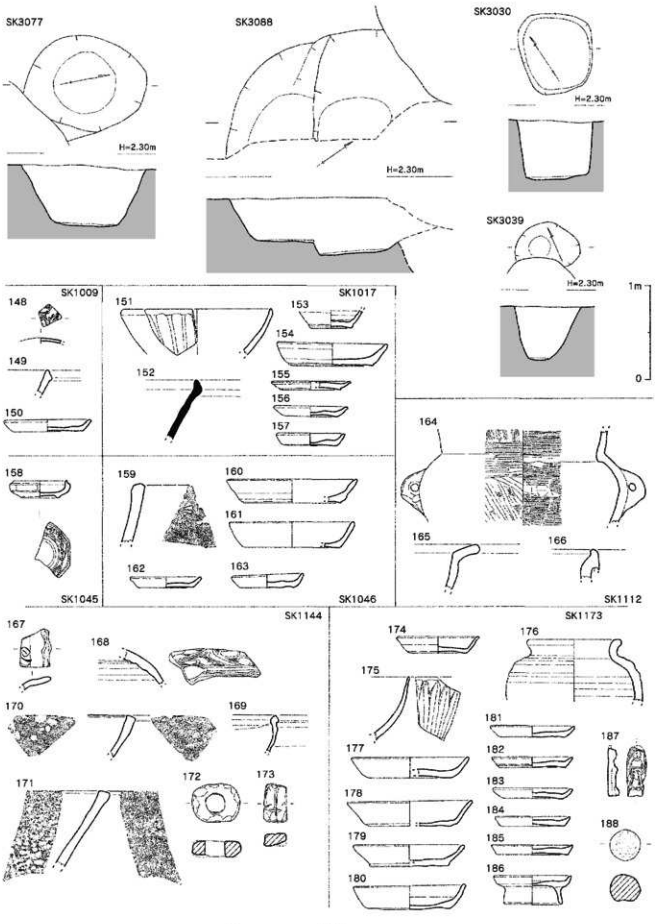
SK2210(第16図)　調査区中央に位置する。平面形はややいびつな楕円形を呈し、長径は約1m、短径65cm、検出面からの深さ34cmを測る。底面東側の径40～55cmの範囲に角礫(径15～20cm)が重なって出土した。掘立柱建物の根石と思われる。周辺の柱穴で出土した根石は径20～40cmの板状の石



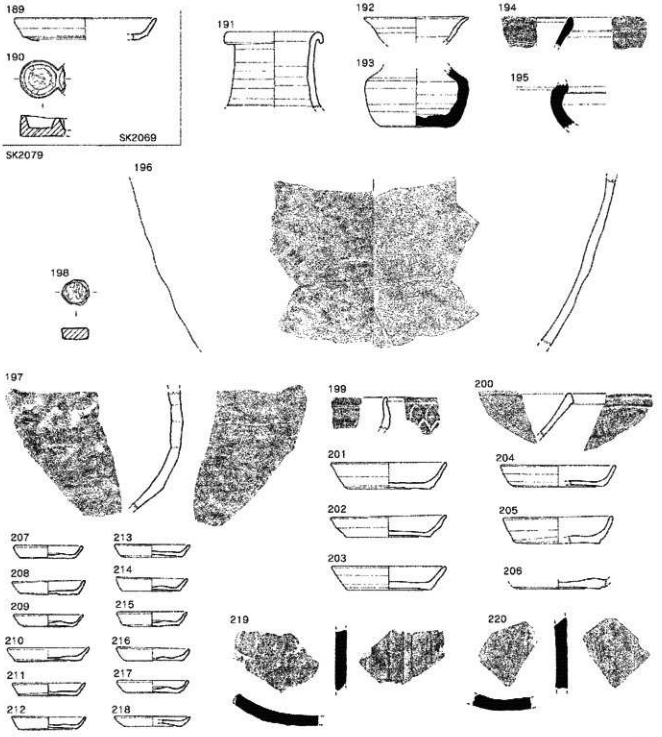
第15図　土坑実測図2（1/40）



第16図　土坑実測図3（1/40）



第17図　土坑実測図4（1/40）・土坑出土遺物実測図1（1/4）

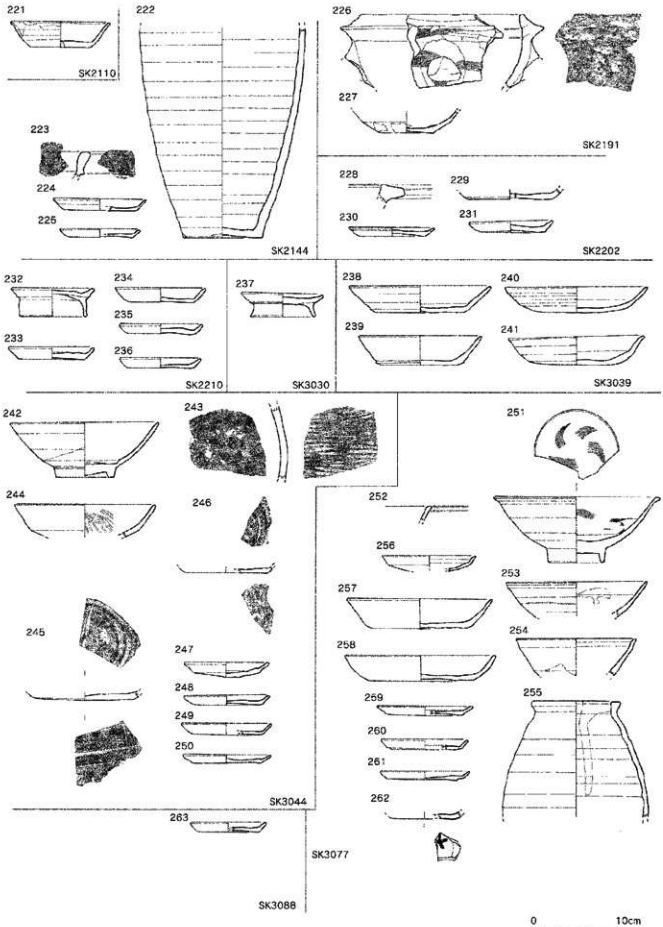


第18図　土坑出土遺物実測図2（1/4）

が多く、握り拳台の礫を敷いた例は少ない。出土遺物（第19図232～236）。232～236は土師皿で、232は高台がつく。他に白磁皿IX類が出土している。13世紀後半頃と思われる。

SK2223(第16図)　調査区の東側に位置する。平面形は長方形で、主軸をN-34°-Eにとる。現地割りに沿う。長径143cm、短径95cm、検出面からの深さ25cmを測る。白磁皿、青磁皿、陶器耳壺、瓦器椀、土師椀、土師坏・皿、土師質大甕片が出土した。12世紀後半から13世紀前半である。

SK2235(第16図)　調査区中央のやや南東寄りに位置する。1区では検出できなかった。平面形は楕円形で主軸はN-34°-Eを測る。現地割りに沿う。長径112cm、検出面からの深さ53cmを測る。土師坏片が3点だけ出土した。時期不明である。



第19図　土坑出土遺物実測図3（1/4）

SK3030(第17図)　調査区の東側に位置する。平面形は隅丸長方形で、長径87cm、短径78cm、検出面からの深さ63cmを測る。出土遺物(第19図237)。237は高台付土師皿である。口径8.6cm、器高2.7cmを測る。黄褐色を呈する。他には白磁合子、白磁皿IX類、黒褐釉陶器、土師坏・皿、土鍋などが出土した。13世紀後半と思われる。

SK3039(第17図)　調査区の東側に位置し、SK3077に切られる。平面形は東西に長い楕円形で、主軸はN-66°-Wを測る。長径70cm、短径は推定で50cm、検出面からの深さ58cmの柱穴状の掘り込みである。埋土中から完形の土師坏が4枚出土した。建物解体時に行われた祭祀で埋納されたものか。出土遺物(第19図238～241)。238～241は土師坏である。238・239は糸切りで板状圧痕がみられる。240・241はヘラ切りで、240は外底面にナデを施し、241は板状圧痕がみられる。他には土師皿(ヘラ切り)、白磁碗Ⅳ類、須恵器坏、甕などが出土した。12世紀前半から中頃か。

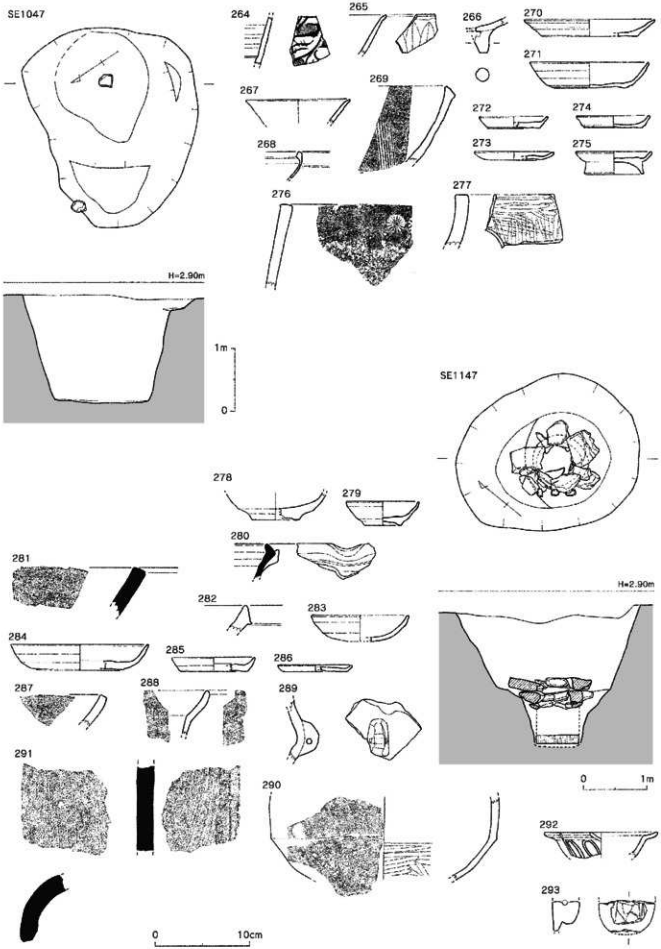
SK3077(第17図)　調査区の東側に位置し、SE2145に切られる。平面は南北に長い楕円形で主軸はN-11°-Eを測る。長径128cm、短径102cm、検出面からの深さ64cmを測る。出土遺物(第19図251～262)。251～253は白磁碗である。254は天目碗、255は陶器壺Ⅱ類か。256は瓦質の皿で口縁端は黒色を呈す。257・258は土師坏、259～262は土師皿で、262は外底部に墨書がある。13世紀後半と思われる。

SK3088(第17図)　調査区の南東隅に位置し、SE2145に切られる。遺構の東側が調査区外で、平面形などは不明である。現状で南北長2.2m、東西長1.2mを測る。出土遺物(第19図263)。263は土師皿である。復元口径8.1cm、器高1.1cmを測る。その他瓦器椀と土師坏が出土した。12～13世紀と思われる。3)井戸　調査区内で出土した11基のうち10基を報告する。

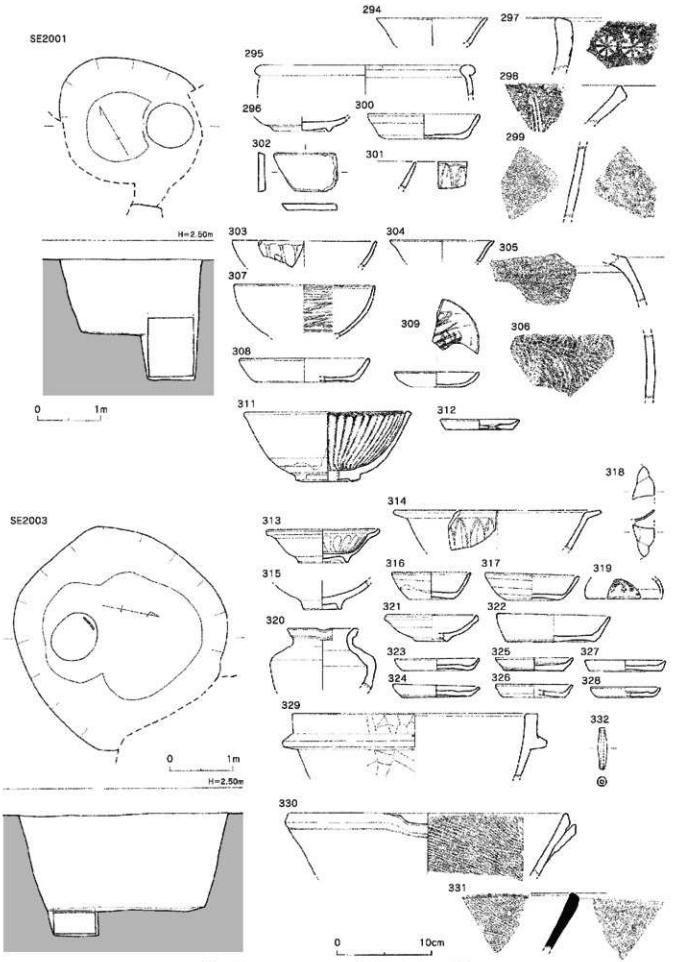
SE1047(第20図)　調査区の北西隅に位置する。平面形はいびつな楕円形で長径3.3m、短径2.7m、検出面からの深さ1.7mを測る。井筒は検出できなかった。本遺構はSE2001との切り合いが明確ではなく、SE2001と同じ遺構の可能性や、逆に2001に削られた可能性が考えられる。出土遺物(第20図264～277)。264は青磁壺、265は細型連弁の青磁碗、266は青磁香炉の脚である。267は白磁皿IX類、268は陶器小盤Ⅰ類、269は陶器擂鉢である。270・271は土師坏、272～275は土師皿で275は高台付である。276・277は瓦質鉢で276は外面にスタンプ、277は外面にミガキを施す。13～14世紀と思われる。

SE1147(第20図)　調査区の南東隅に位置し、SD1036やSK1144などに切られる。平面形は東西に長い楕円形で、主軸はN-65°-Wを測る。長径293cm、短径241cm、検出面からの深さ225cmを測る。検出面から1.5m下にテラスがあり、それから上は石組みの井筒である。現状では石組みの高さは50cm程で、井戸の廃棄時に石を抜いている。テラスから下は石組みが無いが、最下層に木質が残っており、石組みの下は木桶である。木桶は径70cm弱、高さ53cm前後と推定される。64次で出土した他の井筒はすべて木桶を使用しており、石組みの井筒はこの1基のみである。出土遺物(第20図　278～293)。278・279は高麗青磁碗である。280・281は須恵質擂鉢、282は陶器鉢である。283は瓦質坏、284は土師坏で、285・286は土師皿である。287・288は土鍋、289は土師質の茶釜、290は瓦質の湯釜である、291は須恵質の丸瓦で、凸面は縄目圧痕、凹面は布目が残る。292・293は井筒から出土した。292は青磁坏、293は滑石製のスタンプで未製品と思われる。出土遺物から14世紀頃の埋没である。

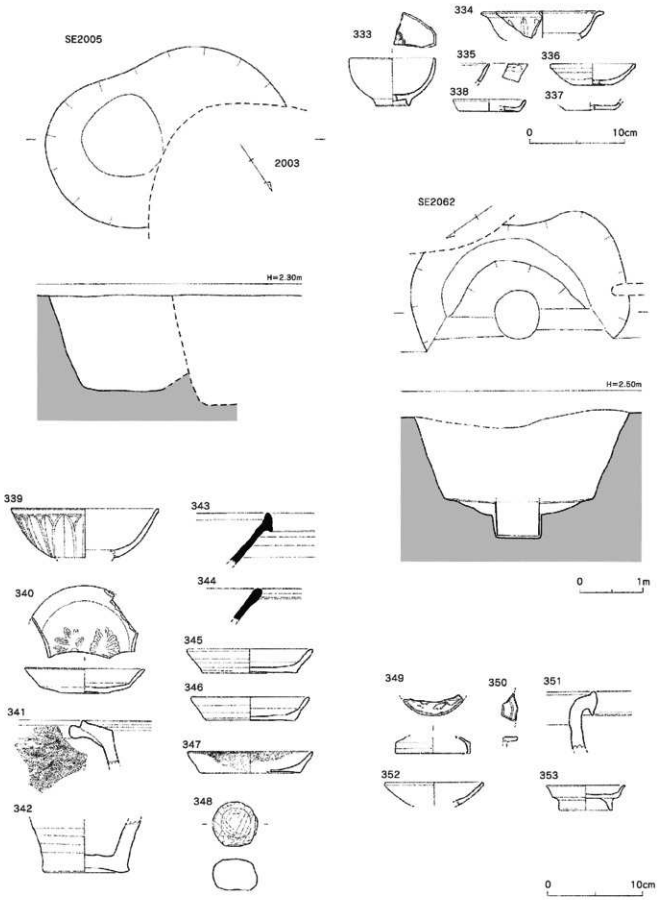
SE2001(第21図)　調査区の北西隅に位置し、SE1047と切り合う。周囲の遺構との切り合いが多く、平面形は不明である。掘方は長径が約2.5m、短径が2.3mを測る。検出面から1.2mの深さまで掘り下げ、底面の東端を径80cm、深さ70cm掘り下げてから井筒を設置している。井筒は木桶を使用している。木質の遺存状態は悪いが、その痕跡は高さ1m近く確認できた。出土遺物(第21図294～312)。294～302は掘方上層、303～310は掘方下層、311・312は井筒から出土した。294は白磁皿IX類、295は陶器鉢Ⅳ類か。296は瓦器椀、297は瓦質火鉢、298・299は瓦質(擂)鉢である。300は土師坏、



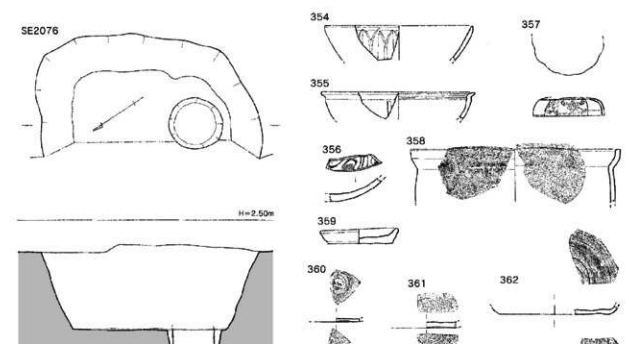
第20図　SE1047・1147実測図（1/60・1/4）



第21図　SE2001·2003実測図（1/60·1/4）



第22図　SE2005・2062実測図（1/60・1/4）



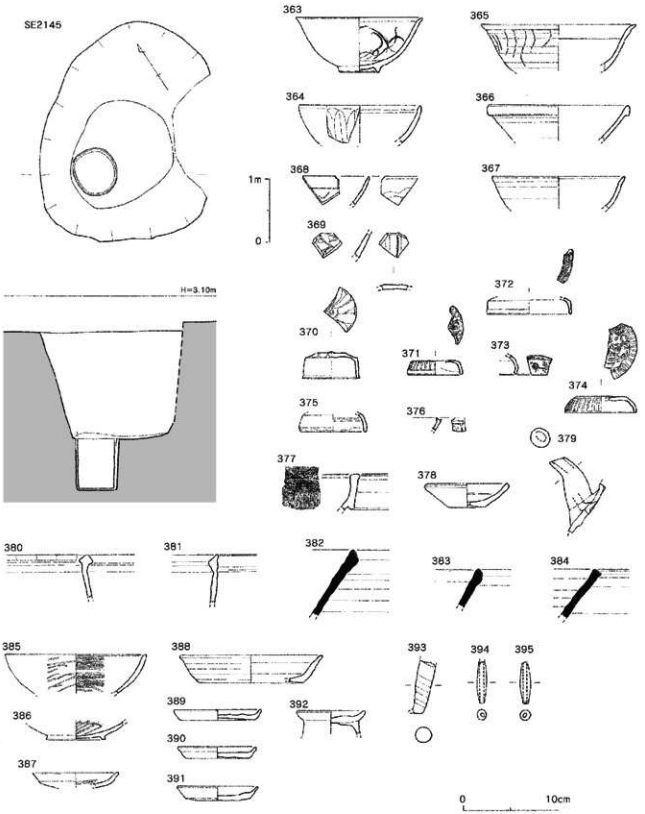
第23図　SE2076実測図（1/60・1/4）

301は龍泉窯系青磁碗で細型連弁である。302は砥石である。303～309は掘方下層から出土した。303は細型連弁の青磁碗、304は白磁皿IX類、305・306は陶器大甕、307は瓦器椀、308は土師坏である。309は瓦質の皿で灰～黒色を呈し、内面に並行するミガキと乱方向の螺旋状のミガキがみられる。311・312は井筒からの出土で、311は龍泉窯系青磁碗で内面に細型連弁がつく。312は土師皿で底部に穿孔がある。13世紀後半～14世紀前半と思われる。

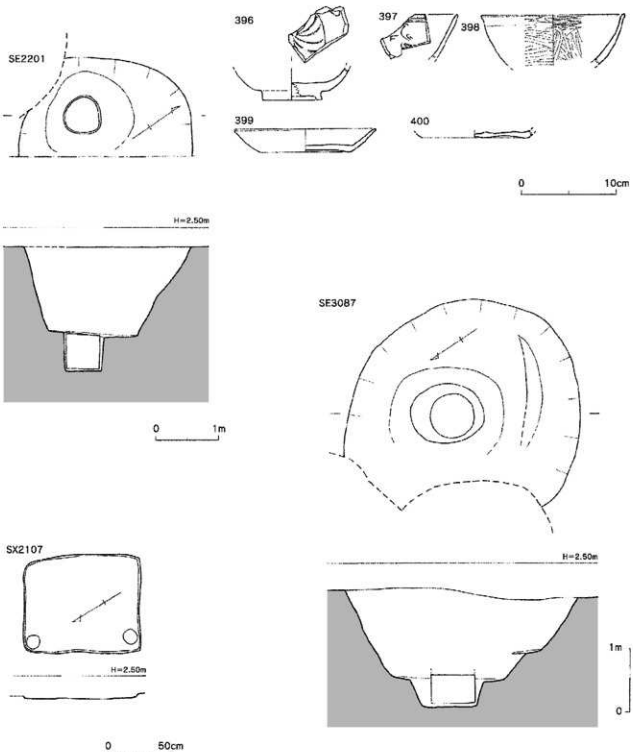
SE2003(第21図)　調査区中央に位置し、SE2005を切る。平面形は円形で、径3.4m、検出面からの深さ195cmを測る。検出面から1.5mの深さまで掘り下げ、底面の南端を径80cm、深さ45cm程掘り下げて、井筒を据えている。井筒は径65cm程の木桶であるが、木質の残存状態は悪く、高さ40cm程の痕跡のみ確認できた。出土遺物（第21図313～331）。313・314は龍泉窯系青磁坏である。315は青磁小碗、316・317は白磁皿IX類、318は青白磁の輪花碗で、319は青白磁の合子蓋である。320は陶器壺、321は陶器高台付皿である。322は土師坏、323～328は土師皿である。329は滑石製石鍋で、330は瓦質鉢、331は須恵質鉢、332は土錘である。出土遺物から14世紀前半である。

SE2005(第22図)　調査区中央に位置し、SE2003に切られる。平面形は東西に長い楕円形であるが、2基の井戸の切り合いと思われる。井筒は検出できなかったが、SE2003に削平された可能性が高い。出土遺物(第22図333～338)。333・334は龍泉窯系青磁で333は小碗、334は坏である。335～337は白磁皿で335・337はIX類、336はII-2類か。338は土師皿である。13世紀後半～14世紀前半である。

SE2062(第22図)　調査区西端に位置し、SE2003に切られる。現状で南北長3.4m、検出面からの深さ2mを測る。底面中央を径80cm、深さ40cmに掘り下げ、井筒を据える。井筒は径70cm程の木桶で、木質の残存状態が悪く痕跡のみ検出した。出土遺物（第22図339～353)。339～348は上層で出土した。339は龍泉窯系青磁碗II類である。340は白磁皿VI-2aか。341は陶器甕I類の口縁、342は陶器壺底部、343・344は須恵質鉢、345～347は土師坏である。347は灯明皿として使用している。348は石玉である。349～353は掘方下層からの出土である。349は白磁合子蓋、350は龍泉窯系青磁坏の口縁、351は常滑壺の口縁、352は陶器坏、353は土師質高台付皿である。13世紀中頃～後半である。



第24図　SE2145実測図（1/60・1/4）



第25図　SE2201・3087実測図（1/60・1/30・1/4）

SE2076(第23図)　調査区の北西隅に位置する。現状で南北長3.5m、検出面からの深さ1.9mを測る。検出面から1.4mの深さまで下げ、底面の南西隅を径82cm、深さ53cm程掘り下げて井筒を据えている。井筒は径64cmの木桶で、木質の残存状態は悪く痕跡のみ検出した。出土遺物（第23図354～362）。354は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、355は同安窯系青磁碗、356は青磁碗小片で内面に細かな草花文を施す。357は青白磁合子蓋で復元口径7.5cmを測る。口縁端は露胎である。胎土は白色で、黒色の微粒子を少量含む。358は土鍋である。359･360は土師皿、361･362は土師坏である。360～362は内底部に工具を使用したような強い回転ナデがみられる。13世紀中頃～後半である。

SE2145(第24図)　調査区東端に位置する。平面形は楕円形で、主軸はN-33°-Eを測る。検出面から1.7mの深さまで掘り下げ、底面の西端を径72cm、深さ76cm程掘り下げて井筒を据えている。井筒は径60cm程の木桶で、木質の遺存状態は悪いが、痕跡は高さ80cm近く確認できた。出土遺物（第24図363～395）。363・364は龍泉窯系青磁碗で363はⅢ－1B類、364はⅢ-2C類である。365～368は白磁碗で、365はV-2類、366はⅣ類、367はⅨ類である。369は青白磁で内面に型押しによる草花文を施す。370～375は白磁合子蓋、376は白磁合子身である。377は陶器鉢Ⅱ-1a、378は陶器坏である。378は復元口径9cm、器高2.6cmを測り、暗褐色～赤褐色を呈する。379は陶器水注である。380・381は陶器盤、382～384は須恵質鉢、385・386は瓦質椀、387は瓦質皿、388は土師坏、389～392は土師皿で、392は高台が付く。393は土師質の脚で、断面は径13cmを測る。394・395は土錘である。14世紀前半である。

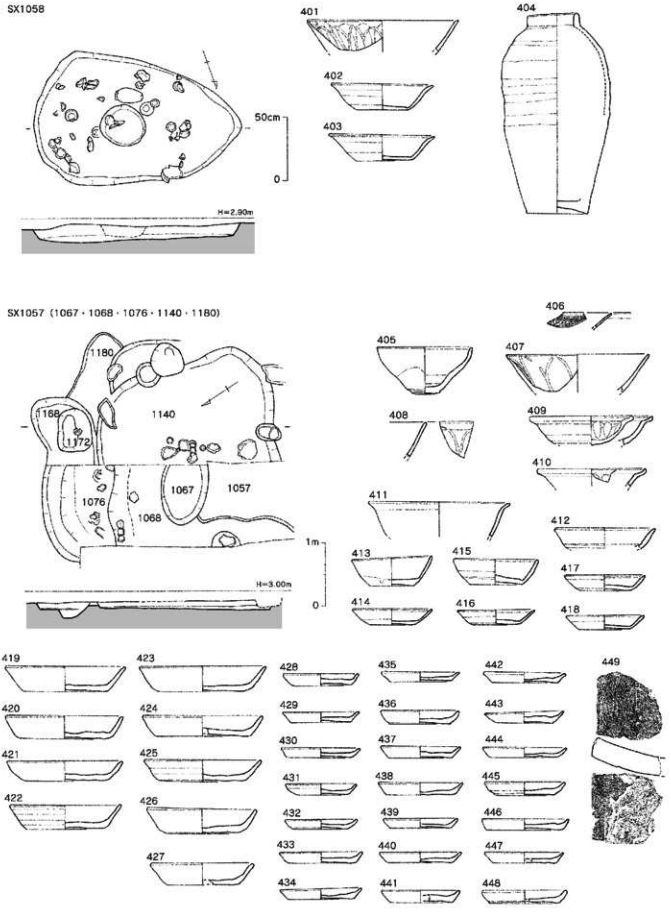
SE2201(第25図)　調査区の東端に位置し、遺構の東側半分が調査区外に延びる。平面形は隅丸方形で、主軸はN-34°-Eを測る。現地割りに沿う。南北径2.8m、検出面からの深さ2mを測る。検出面から深さ1.5m程掘り下げ、底面中央を径60cm、深さ60cm掘り下げて井筒を据えている。井筒は木桶を使用するが、木質の遺存状況は悪く、痕跡のみである。出土遺物(第25図396～400)。396･397は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。398は瓦器椀で外面は横方向のミガキ、内面は口縁が横方向の細かなミガキで、下半は粗い縦方向のミガキである。399･400は土師坏である。12世紀後半～13世紀前半である。

SE3087(第25図)　調査区中央の少し南側に位置し、遺構の西側をSK1017などに切られる。平面は楕円形で長径3.7m、検出面からの深さ1.85mを測る。検出面から深さ1.5mまで掘り下げ、底面中央に径115×95cmの楕円形を深さ45cmまで掘り下げて井筒を据えている。井筒径は69cmを測る。井筒は木桶を使用しているが、木質の遺存状況は悪く、痕跡のみを確認した。遺物がなく時期不明である。

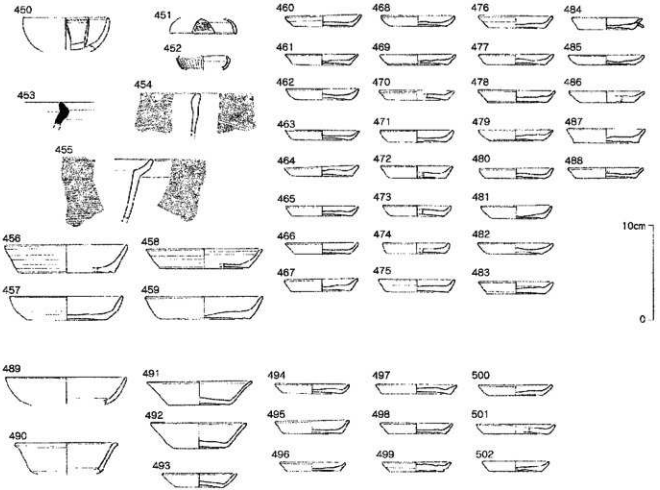
4)整地層　調査区北東壁面の土層観察では第1面直下に薄い整地層が数枚確認できる。ここであげる1057と1058は1面で検出して掘り下げたが、掘り込みが数cmと浅く底面も平らで、一部が周囲の整地層に滑り込むことから、整地層と考えて報告する。

SX1058(第26図)　調査区の北側に位置し、Ⅰ区とⅡ区に跨る。平面形は卵形を呈し、主軸はN-70°-Wを測る。長径163cm、短径106cm、深さ8cmを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物(第26図401～404)。401は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、402・403は白磁皿Ⅸ類で完形品である。404は陶器壺の完形品である。この他にも土師坏・土師皿が完形に近い状態で多く出土したが、復元する時間的余裕がなく記載できない。完形の陶器瓶や白磁皿Ⅸ類、土師坏、土師皿がまとまって出土しており、整地に伴う祭祀に使用した可能性がある。13世紀後半と考えられる。

SX1057(第26図)　1057･1067･1068・1076・1140・1180などどれも浅い窪みが連続する。1057出土遺物（第26図405～449）。405は天目碗、406は青白磁碗、407～410は龍泉窯系青磁で、407・408は碗Ⅱ類、409・410は坏Ⅲ類である。411は白磁碗Ⅸ類、412～418は白磁皿のⅨ類である。419～427は土師坏、428～448は土師皿、449は土師質の平瓦である。13世紀後半と考えられる。1067出土遺物(第27図450)。450は青磁小碗で復元口径は9cmを測る。内面の口縁端と口縁上面は釉



第26図　SX1058、1057実測図（1/30・1/60・1/4）



第27図　SX1057（1067・1068）出土遺物実測図（1/4）

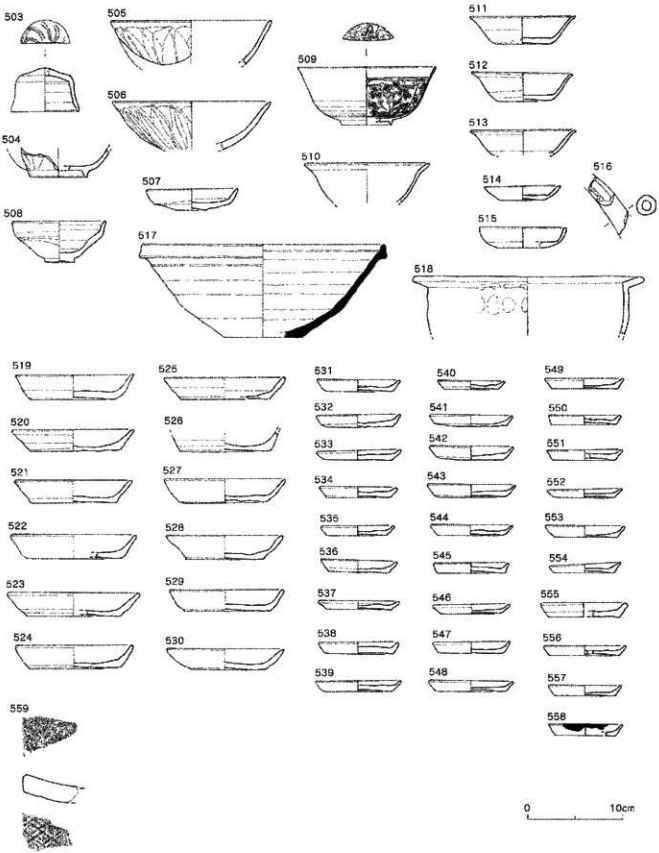
を掻き取り、露胎である。内面は露胎の下に日跡と思われる細かな点が水平に並ぶ。その他には陶器盤、備前擂鉢、土鍋、土師坏などが出土している。14世紀代である。

1068出土遺物(第27図451～502)。451～488は上層から出土した。451は青白磁合子蓋、452は白磁合子身である。453は須恵質鉢、454は陶器鉢、455は土鍋片である。456～459は土師坏、460～488は土師皿である。489 ～502は下層から出土した。489は龍泉窯系青磁皿、490は龍泉窯系青磁坏である。491～493は白磁皿Ⅸ類、494～502は土師皿である。13世紀後半～14世紀初頭である。

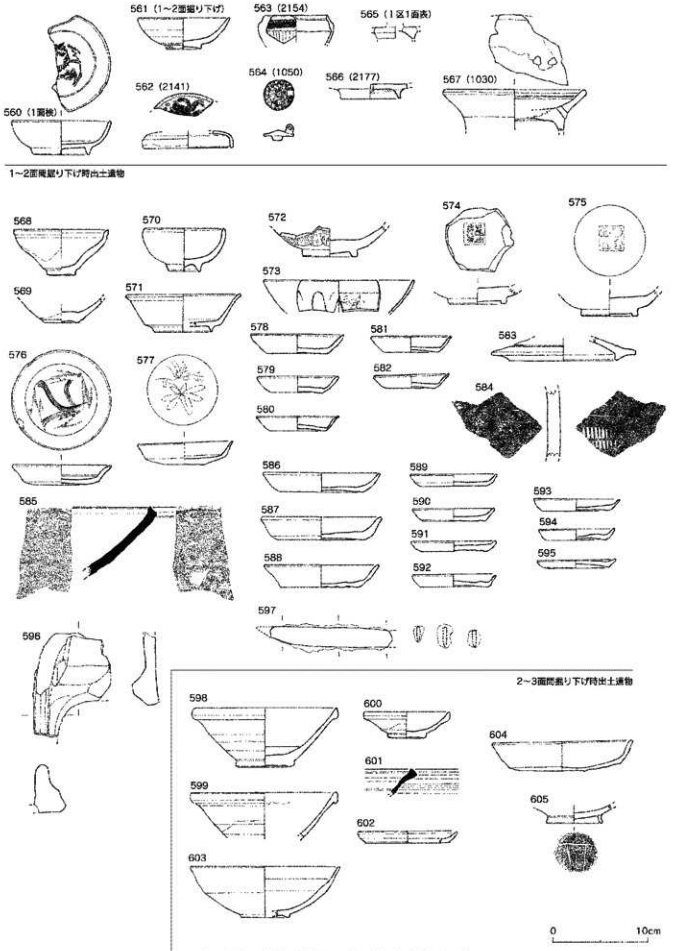
1140出土遺物(第28図503～559)。503は青白磁蓋、504～506は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、507は龍泉窯系青磁皿Ⅰ類、508は天目碗である。509･510は白磁碗である。509はX類で内面に型押しの草花文を施す。器壁は厚さ2㎜と薄く、口縁端は釉を掻き取った露胎である。510はⅨ類である。511～514は白磁皿のⅨ類、515は白磁皿のⅧ－1類である。516は白磁水柱、517は須恵質鉢、518は土鍋、519～530は土師坏、531～558は土師皿で558は灯明皿として使用している。556は底部に焼成後の穿孔がある。559は土師質の平瓦で、格子の中に「十」がみられる。遺物から13世紀後半と思われる。どの層も12世紀中頃以降の遺物を多く含むが、新しい遺物は13世紀後半～14世紀初頭である。

5)その他の遺構と遺物

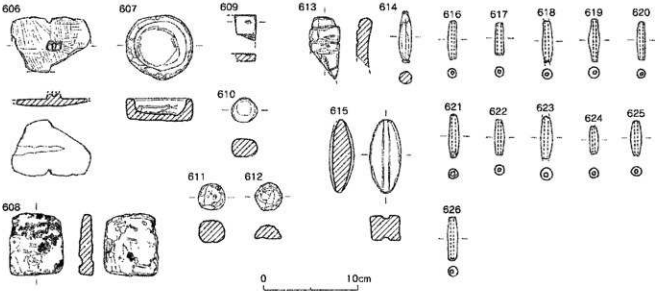
SX2107(第28図)　第2面の北端に位置する。長方形の木枠の掘り込みで、主軸はN-32°-Eを測る。現地割りに沿う。長径90㎝、短径78㎝を測り、薄い板状の木質の痕跡を確認した。木箱もしくは、板で囲んだものである。中央に楕円形の掘り込みがあり、埋土は炭化物を多く灰褐色である。北西と南西の隅には径10㎝の白色粘土が詰まった掘り込みがあり、板の倒壊防止用に棒が立ててあった可能性がある。掘方の深さは2㎝程で、埋土は茶褐色と白色の粗砂である(図版4-5)。1段下げで無く



第28図　SX1057（1140）出土遺物実測図（1/4）



第29図　遺構面間掘り下げ時出土遺物（1/4）



第30図　石製品・石錘・土錘実測図（1/4）

なったため詳細は不明である。遺物は出土していない。

SX3006（図版1-8）　調査区の北端の南北1.7m、東西1.1mの範囲に径1～3cm程の小礫がまばらに分布した状態で出土した。分布の北端は調査区外に延びる。また、柱穴や土坑に切られており、元々の散布範囲は広かった可能性がある。遺物は伴っていない。

その他の遺物　560～567は遺物だけの報告である。（　）内の数字は出土遺構である。

560は青磁皿（II区1面検出時）、561は青磁碗（II区１～２面間掘り下げ時）、562は青白磁合子蓋(2141)、563は青白磁の小壺(2154)で復元口径は5.7cmを測り釉は透明に近い青緑色を呈す。564は白磁の蓋(1050)で径3.2cmを測る。565は陶器蓋（Ｉ区1面表採）である。釉は上面のみに施す。566は土師椀(2177)で外底部の高台内は墨が付着する。硯として使用か。567は土師質の高台付坏(1030)か。復元口径15.2cmを測る。坏部内面から外面の高台外側へ向けて穿孔があり、用途は不明である。

568～597（第29図）は1～2面間掘り下げ時出土の遺物である。568･569は天目碗、570～576は青磁、577～582は白磁皿、583は陶器蓋、584は瀬美焼きの壺胴部である。585は須恵質鉢、586～588は土師坏、589～595は土師皿、596は移動式竈か、597は刀子である。13世紀後半の遺物が多い。

第29図の598～605は2～3面間の掘下げ時出土分の遺物である。598～600は白磁碗Ⅳ類、601は須恵質鉢、602は土師皿、603は瓦器椀である。604はII区2～3面間掘下げ時に出土した炭化物層に伏せてあった完形の土師坏である。口径14.9cm、器高3.25cmを測る。色調は淡褐色を呈し、全体に煤が付着する。605はII区の2～3面間掘下げ時出土の瓦器椀で見付きにヘラ記号がある。

石製品（第30図　606～612）　606は滑石製スタンプである。石鍋の再利用品である。607は滑石製の容器である。口径6.8cm、器高2.35cmを測る。608は滑石製で温石か。6.5×5.6cmで、厚さは1.5cmを測る。609は石製品の一部で石帯の可能性もある。610は瓦玉、611･612は石玉である。

漁錘（第30図613～626）　613は滑石製で石鍋の再利用品である。端部に抉りが入り、石錘と思われる。614は滑石製石錘である。両端に抉りを入れ網を結ぶタイプである。615～626は土錘である。

4 小結

今回の64次調査では1面で13世紀後半～14世紀中頃の遺構、2面で13世紀中頃から後半、3面で12世紀～13世紀中頃の遺構を確認した。１面の上層には遺物をほとんど含まない厚さ30～60cmの茶褐色土がある。1面の時期から茶褐色土の堆積は15世紀以降と考えられるが、調査区壁面の土層では茶褐色土層から1面目に掘り込む遺構がみられないことから、14世紀末～15世紀頃に井戸や建物が廃棄

されて暗茶褐色土が堆積し始めてからは、土坑や井戸、柱穴などの掘り込みが途絶える。この茶褐色土層が人為的な盛土かどうかは現在の時点では不明であるが、15世紀以降から近代までの間掘り込みが無いということは、土坑や井戸などの掘り込みに対してかなり強い規制が働いたと考えられる。

検出した遺構は3面と2面では小径の柱穴が多く、大形の土坑は少ない。集落化が始まった当初は、小型の掘立柱建物などが建てられたと考えられる。調査区北東隅の調査区壁面の土層では、集落化が始まった砂丘面直上に数枚の焼土ブロックを含む層や炭化物多く含む層をみることができ、これは集落化の初期の段階で数回の火災が起きたものと思われる。その後、13世紀後半になると区画用の溝が掘られ、本格的に街に取り込まれていく。この溝は現在の街割に沿うが、1・2面のほぼ同じ場所で溝が出土するのは道路の嵩上げに伴って溝を掘り直した結果と考えている。

64次調査区周辺では調査例が少なく不明な点が多い。調査区内では砂丘面や茶褐色土層上面の標高は南西側に向かって高くなっており、このまま筥崎宮に向かって高くなるものと考えていたが、65次調査で南側（筥崎宮との間）に谷が入るなど、予想より複雑な地形であることが判明した。区画については、もっと広い範囲を含めた考察が必要になるので、今後の周辺調査の進展を期待したい。

箱崎64 出土銅銭一覧表

個別番号	出土遺構	銭種	時代	初鋳年					
1	1009	紹聖元寶	北宋	1094	23	2006	元豊通寶	北宋	1078
2	1016	熙寧元寶	北宋	1068	24		熙寧元寶	北宋	1068
3	1034	熙寧元寶	北宋	1068	25	2006掘り方	元祐通寶	北宋	1086
4		無文銭			26	2008	□□□寶		
48		小片のため不明			27	2076掘り方	元祐通寶	北宋	1086
5		景徳元寶	北宋	1004	28	2081	小片のため不明		
6	1041	祥符元寶	北宋	1008	29	2112	□□元寶		
7		淳化元寶	北宋	990	30	2143・2144	天聖元寶	北宋	1023
8		判読不能			31	Ⅰ区1面表	至道元寶	北宋	995
49		判読不能			32	Ⅰ区1面廃土中	皇宋通寶	北宋	1038
9	1047	熙寧元寶	北宋	1068	33	Ⅰ区1面清掃	治平元寶	北宋	1064
10	1047周辺含む	元豊通寶	北宋	1078	34	Ⅰ区1～2面掘下げ	皇宋通寶	北宋	1038
11	1052下層りすぎ	景□□寶			35		熙寧元寶	北宋	1068
50		小片のため不明			36		皇宋通寶	北宋	1038
12	1057	元豊通寶	北宋	1078	37	Ⅱ区1面検出	聖宋元寶	北宋	1101
13	1108	紹聖元寶（背面に二）	南宋	1190	38	Ⅱ区1～2面掘下げ	天聖元寶	北宋	1023
14	1115	元豊通寶	北宋	1078	39		判読不能		
15	1140	判読不能			40		判読不能		
16		判読不能			41	Ⅱ区1～2面間掘下げ	咸平元寶	北宋	998
17		判読不能			42		判読不能		
18		判読不能			43		治平元寶	北宋	1064
19	1150	崇寧通寶	北宋	1103	44		判読不能		
20		庵□通寶			45	ラベルなし	元祐通寶	北宋	1086
21	2005	至道元寶	北宋	995	46		熙寧元寶	北宋	1068
22		政和通寶	北宋	1111	47		政和通寶	北宋	1111

1.Ⅰ区1面（南から）

2.Ⅰ区2面（南から）

3.Ⅰ区3面（南から）

4.Ⅱ区1面（西から）

5.Ⅱ区2面（西から）

6.Ⅱ区2面（北から）

8.Ⅱ区3面（北から）

8.SX3006

1.SE1147（西から）

2.SE2001（北西から）

3.SE2003（北西から）

4.SE2062（東から）

5.SE2076（北から）

6.SE2145（東から）

7.SE2201（北から）

8.SE3087（南西から）

1.SK1035上層（北から）

2.SK1035下層（北から）

3.SK2075（北から）

4.SK3018（東から）

5.SK3044（南から）

6.SK1173遺物出土状況

7.SX1058（北から）

8.SX1057（西から）

1.SK1017土層（南から）

2.SK1034土層（西から）

3.SK1045礫出土状況（西から）

4.SK1112（北から）

5.SX2107検出状況（東から）

6.SD1008・SD1016（東から）

7.SD1188土層（西から）

8.調査区北東壁土層

－報告書抄録－

ふりがな	はこざき
書名	箱崎43
副書名	箱崎遺跡第64次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1128集
編著者名	屋山 洋
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	福岡市中央区天神1丁目8－1
発行年月日	2011年3月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
はこざきいせき 箱崎遺跡 第64次調査	ひがしくはこざき 東区箱崎1丁目2804番 2,9,10	40131	2639	33° 37′ 1″	130° 25′ 20″	20090803～ 201008	209	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡 第64次調査	集落	古代末～中世	溝、井戸、土坑	貿易陶磁、土師坏・皿、国産陶器甕	整地層や井戸、土坑から貿易陶磁器が多量に出土した。

要約	今回の64次調査では12世紀～14世紀中頃の遺構を確認した。12～13世紀前半の遺構は小型の柱穴が多く、土坑や区画の溝などは出土していない。集落化の初期は小型の掘っ立て小屋のような建物が並んでいた。13世紀後半頃には調査区全体に整地が行われ、その後は、井戸や大型の土坑、道路側溝と考えられる溝などが見られるようになり、箱崎の集落の中に取り込まれていったと考えられる。遺物は整地層とその上面の遺構から貿易陶磁器が多量に出土している。14世紀後半以降になると遺物はほとんど見られなくなり、上層に堆積した暗茶褐色土層からの掘り込みも見られない。井戸や塵穴などを掘ることに対しかなり強い規制があり、それが近代にいたる長期間続いたと考えられる。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1128集

箱崎 43

－箱崎遺跡第64次調査報告－

2011年（平成23年）3月18日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1

印刷 西福岡印刷所
福岡市西区姪浜6丁目9－27